
魔王を拾ったわけだけど

しろやまツトム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王を拾ったわけだけど

【Nコード】

N8179X

【作者名】

しろやまツトム

【あらすじ】

いやあね、俺はただ学校から早く帰って、双眼鏡を使って隣の奥さんの生着替えでも堪能しようと思ってただけなんですよ。そしてらね、道端に可愛いコスプレした女の子が倒れてたものだから、恩を売ってあんなことやこんなことをしてもらおうかなと思って、善意から助けたわけです。ところがコイツ、綺麗なのは中身だけで、短気な乱暴者だったんです。しかも自分を異世界の魔王だと思っているキチガイでした。あまつさえ、命の恩人である俺に世界征服の手伝いをしろと言いまして……。

魔王の女の子と変態男子高校生の、世界征服？のお話。

俺と君と手下

「ねえ、こんなへんぴな所より、前線にもつと兵力を集中させるべきじゃない？」

案の定、彼女はその細い指でディスプレイ上の拠点を指し、蒼の光を宿した目で俺を見つめながら、解せないといって口調で提案してきやがった。まったく、この乱暴者……もとい、お嬢様は戦術の「せ」の字も分かってないらしい。お前が指し示した場所の戦力を減らしてみろ、隣接する二つの都市に所属するギルドの連中にあつと言う間に陥落させられてちまうっつーの。だいたい有事でもないのに、前線に必要な以上の戦力を集中させてどうする。こっちは拠点も少ないんだから、兵力をそうやすやすと移動するわけにはいかないっての！

上記のようなことをいいとこ育ちのお嬢様でも分かるように、そして生後三年の可愛い男の子でもたやすく理解出来るよう、詳しく説明しようとしたところ、

「分かった！ 分かったって言ってるじゃない！ クドい！」

などとマジギレされた。俺は悟る。多分コイツは、俺がさっき話したことの25%も理解していないと。何故ならその行動が、男子高校生が母親に説教を食らわせられたときに取るパターンと、完璧に一致したからだ。ちなみにその男子高校生とは、誰でもない、この俺のことだ。

「お嬢様、コウジさんの言うことももつともですよ。お嬢様も一軍の総大将なんですから、部隊配置などの知識も、しっかり頭に入れ

ておかないと」

彼女の隣……おっと、ちなみにこの馬鹿女は俺の左側の椅子に我が者顔でふんぞり返っているわけであるが、さらにその隣で、まるで忍者のように膝を立てて脳筋に付き従っている、ショートヘアーで目がキリツとした美少女が、脳筋にそう進言した。

「もう、レイミイまで小言言わないでよ」

腹心の部下が俺の味方をしたので、しゅしゅといった様子で彼女は引き下がった。うんうん、レイミイちゃんはすっかり分かってる。さすが、俺の将来のフィアンセ兼メイドさん兼女王様だ。胸がない？ そんなの飾りに過ぎんだよ。変態どもには分かんたろうがな。

取りあえず話がひと段落ついたので、俺はこの場で話す予定だった話を始めることにした。

「それじゃあ、今後の方針を説明するぞ。まずは東の砦を奪回して……」

そのとき、俺のPCからけたたましい警告音が鳴り響いた。

「――敵襲ですね」

レイミイが、呟くように言う。俺はPC上のマップで敵が迫っている拠点を確認する。先ほどどこかの誰かさんが言及していた砦だった。それみる、早速狙われたじゃないか。

「レイミイ、マリージの砦の指揮官を映し出してくれ」

「分かりました」

レイミイが頷いて、そばに置いてあった丸状の鏡に、何やら呪文を唱えだした。ちなみにマリージの砦とは、敵襲を受けた砦の名前である。

レイミイが呪文を唱え終えた後、鏡に一匹のゴブリンが映し出された。その顔は恐怖でひきつっている。無理もない。この砦の兵士達は彼も含めて、新米兵士ばかりなのだから。

「ダ、ダンナ！ 助けてくださいえ！ 敵が！」

「冷静になってくれ、取りあえず状況を教えてくれないか。敵はどここの都市からやってきた？」

「メルンの町からです！」

「ということは、まっくらの洞窟は突破されてしまったということだな？」

まっくらの洞窟とは、メルンとマリージの間に存在するダンジョンである。野生のビッグオクトパスというモンスターが支配していたはずだ。地名が幼稚？ お前、ファンタジーなRPGしたことないだろ。ついでに水泳の授業が始まる前の女子更衣室に突撃したこともないだろ。俺はあるぜ。

「そ、そうなんです！ 奴らはあの化け物を倒したその足で、まっすぐこっちに向かってきていやすー！」

お前も化け物の一種じゃねえか。心の中でそう呟いたが、口には出さないでおいた。優しいだろ。ふはははははは。

「そこまで確認しているということは、偵察のブラックバットはもう放っているということだな？」

「はい、ダンナの命令だったんで」

このゴブリンは度胸は足りないが、細かいことでもしつかりこなす。やはりコイツを指揮官にしておいて正解だったな。まあ、顔は近所のカラスからモテまくる俺様に及ばないがな。

「よし、じゃあ今は落ち着いて待機しておいてくれ。後で俺から命令を発信する。くれぐれも下手な行動は起こすなよ」

「へ、へえ」

「それじゃあレイミイ。偵察のバットの視界を見せてくれ」

レイミイはこくと頷くと、鏡に右手をかざす。ゴブリンの映像がおぼろげになり、鏡の中がもやもやとして、場面が切り替わりかわった。ちなみにブラックバットとは、コウモリ型のモンスターのことである。素早い動きで敵を翻弄することが出来、超音波も放つことが出来るが攻撃力も防御力も低く、戦闘には向かない。恋愛にも向かない。

広い大草原の中、四人のパーティーが砦に向かって進んでいた。三人はどうかやら戦士の男で、がっちりとした体格をしている。全員が斧を持っていた。一人は小柄の女性で、白いローブをまとっている。おそらくヒーラーであろう。くそっ、うらやましい。なるほど、強行突破で突き進んできたらしい。各自の身につけているアイテムは、遠出してきたにしては少ない。ビッグオクトパスとの戦闘で消費してしまったのだろう。

「ダンジョンは突破したが、いささか余裕があるので、マリージの砦もついでに攻略してしまおう、という考えでしょうか？」

レイミイの問いかけに、俺は頷いた。

「多分な。町に戻るのが面倒だと思ったんだろう」

だとすれば不幸中の幸い、敵が幾分疲労した状態で戦闘を行うことが出来る。もつとも、こちらが新兵ばかりだという条件には変わらないが。俺は素早く脳内で、今とることの出来る最善の策を考える。こちらの戦力は新米兵士のゴブリン達およそ400人に、ブラックバット50匹。ゴブリンはモンスターの中でも下位に位置し、能力は低い。簡単に言えば雑魚キャラだ。相手は四人とはいえ百戦錬磨の旅人、マトモに戦えば勝ち目は薄い。

「……よし。レイミイ、マリージに繋いでくれ」

「さっそくだが、この前に製造させていた例のアレの数はどれくらいだ？」

「少し待ってて下せえ」

そう言うとゴブリンは近くにいた手下の元へ向かい、数量を確認する。そして、鏡の前に戻ってきた。

「ざっと、200くれえですね」

よし、それだけあれば十分だ。

「分かった。それじゃあ俺が作戦を送る。しっかり実行しろよ」

「へ、へえー！」

俺はレイミイに通信を切るよう伝えると、PCに向きなあって作戦内容をタイピングし、メールとして送信した。これで向こうには手順が書かれた紙が送られているだろう。

「ちょっと、どうするつもりなの？」

今までずっと口を閉じていた彼女は、自分が会話に入れなかったことが気分を害したらしく、不機嫌な口調で言った。

「今に分かるぞ」

俺は少し、顔をにやけさせながら言った。

鏡の中の闘い

レイミイに偵察用バットの映像を映し出させると、パーティーは砦のかなり近くまで来ていた。

「よし、もうすぐマリージの砦だな」

「こんな小さな砦、ビッグオクトパスに比べたらモヤシみたいなもんだぜ」

「ああ、速攻でぶつつぶして戦利品をガツポリ頂こう」

戦士達の言葉に、俺は心の中でほくそ笑んだ。やられるのはそっちだっつーの。

「もう、皆さんもう少し警戒してくださいよ」

戦士達を諫めようとしたヒーラーだったが、何かに気づく。

「皆さん、アレをー！」

ヒーラーの言葉に、戦士達は彼女が指し示す方向を見上げる。砦から、バットの群がパーティーに向かって飛んできていた。少なくとも見積もっても、30匹はいるだろう。

「へっ！ ようやく雑魚どものおでましか」

「あんな奴ら、俺一人で十分だぜ！」

「あーあ、数ばっかいてめんどくせえ。とっとと片づけてしまおうぜ」

戦士達はそう言つと、バットの群に向かって走り出し、攻撃を仕掛けようとする。

しかし。

「クソツタレ！ 逃げてばっかいないで少しは攻撃してきたらどうだ！」

バット達は戦士達の攻撃を避けて距離を取るのみで、自分達から攻撃を仕掛けようとはしない。戦士達も僧侶も飛び道具を持っていないことを良いことに、攻撃の届かない絶妙な距離を保ちながら、戦士達の前を飛び回っている。ただでさえ単純な戦士達は、怒りで正常な判断を失っていた。

「ぶっ殺してやる！」

勢い勇んで突撃し、斧を振るう。その斬撃は一匹のバットの体を、一刀両断し、絶命させた。ただでさえ防御力の低いモンスターだ。屈強な肉体を持つ戦士達の渾身の一撃をまともに食らえば、ひとたまりもない。しかし、戦士達が殺した数は11匹。まだ、その約3倍のバット達が残っているのだ。戦士達もバット達との鬼ごっこに付き合わされ、少しずつ疲労が溜まっていく。ヒーラーはそんな彼

らを、文句も言わずただひたすら治癒していた。

しかしモンスターに気を取られていた彼らは気づいていなかった。自分達がいつのまにか、どんどん砦の方へと誘導されていることに。

「頃合いだな」

鏡で様子を伺っていた俺はそう呟くと、PCにただ一言だけ打ち込み、送信した。

『攻撃開始』

その攻撃は、突如としてやってきた。

「きゃあああ！」

ヒーラーの体に、いくつもの弓矢が突き刺さる。俺はちょっと良心の呵責を覚えるが、これも戦だ。許せ。

「ルーシー！ しっかりしろ！」

戦士の一人が、草原に倒れ込む彼女の所へと向かう。別の二人は、

砦の方を振り返った。

「くっ、砦内からの攻撃か」

どうやら、今まで身を潜めていたらしい。何百匹ものゴブリン達が、その手に弓矢を持ち、こちらを狙っている。

すぐさま、第二射が放たれた。戦士達は疲労もあり、鈍重な動きではあるがその攻撃を回避した。

「馬鹿な！　なんであんなに早く第二射を」

ゴブリン達は二つの班に別れ、交互に攻撃を行っている。そのため、射撃の間隔が短いのだ。数がある程度そろっているからこそ、使える戦法である。そしてコウジは彼らに、まずヒーラーの女を狙うように指示を出しておいた。彼女がやられれば戦士達をサポートするものは誰もいなくなるし、彼女を守って戦わなければならなくなるからだ。

コウジの読み通り、戦士達は集中攻撃を受けているヒーラーの壁にならざるを得なくなる。

「くっ！　これじゃ身動きがとれねえ」

ヒーラーは足に重傷を負い、回復アイテムを使う暇もないほど、弓矢の雨が降ってくる。彼らが取れる行動は、一つだった。

「これ以上は無理だ！　逃げるぞ！」

彼らが弓矢から女を庇いつつ逃げる光景を見て満足した俺は、レイミイに言った。

「もう良いぞ」

「はい」

レイミイは短くそう答えると鏡を撫でる。一瞬にしてそれは、普通の鏡となった。

「ククク。臆病と数は使いようだな」

新米のゴブリン達が勢い勇んで敵に向かっていけないわけがない。弓を与えて、安全な砦内から攻撃をさせればしっかり働けると考えたが、どうやら大正解のようだった。

そして、俺が勝利の快感に酔いしれていられたのは、ほんの数秒だった。

「ちょっと」

俺は正直、気づいていた。戦闘の光景を見ている最中、彼女の顔がどんどん険しくなっていたのを。そして今の声は、明らかかな怒りを含んでいた。彼女の方におそろおそろ振り向く。その額には、青筋が浮き上がっていた。どーやらコイツのポリシーとやらが、俺の行動をお気に召さなかったらしい。ちょーヤバいです、はい。

「なあ、君。どうだい？ 賞味期限切れの生ぬるい牛乳でも」

「いらんわ!」

はい、火に油を注いってしまったようです。おかっしいな。彼女の機嫌を直せる、渾身の冗談になるはずだったのに。女心は分からないが俺は諦めないぜ。なんせ、彼女のようなタイプの弱点は分かっている。

「そんな、額の青筋がピクピクうごめいているキミも、とつてもキユートさ。まるで琵琶湖に浮かぶキオーピー人形のようにだよ」

その後、俺がどうなったかは分からない。ただ一つ言えることは、俺の顔面に音速を越える何かが直撃をしたってことだけだ。世界は真っ白に塗り変えられ、俺は自らの意識が薄らいでいく中でこう思った。

今当たったのが、おっ○いだったら良いな……と。

始まりの日

深い意識の奥底で、俺は夢を見ていた。彼女と出会うキツカケと
なった、あの日の夢を。

大人はみんな、揃いも揃って口にする。『学生時代は良かった』
と。俺から言わせればそれは幻想だ。記憶というのは美化されるも
ので、たいてい無意識のうちに自分自身が都合よく改変しているも
のだ。当時は嫌なことも沢山あったであろう俺の小学校生活も、今
では学習内容の簡単さと、周りにいたロリっ子達のおかげで、戻り
たい時代ナンバーワンにランクインしている。ハアハア。

そういうわけで、俺のまだ美化されていない高校生活は、いたっ
て平凡で単調でエロのエの字もまったく見え、ましてスカートの
中身なんかはまったく見せてもらえない退屈な日々なのである。授
業進度は中学に比べて格段に速くなり、宿題は山積み、美女教師は
全員が既婚者というため息もつきたくなるような毎日だ。俺だけで
なく、一部の壮大な野望を持っていたであろう男子生徒や、独身の
男性教員にとっても。とはいっても、俺は人生に絶望しているよう
な終末思想の持ち主でもないわけで、この何気ない毎日を、自由気

ままに過ごしていたのだった。

「きゃあ！ この変態！ なにすんのよ！」

「ちっ！ 失敗したか！」

ターゲットの女子生徒の悲鳴と、俺の悔しさあふれる声が漏れたのは、ほぼ同時だった。

『スカートの中身を見せてもらえないなら、めくっちゃえば良いじゃないか』という俺の編み出した名言と、自分自身の本能に従い、俺は前を歩いていた女子生徒のスカートをめくろうとしたのだが、周りの空気が読めない女子グループが悲鳴を上げたせいで、ターゲットが振り向いてしまった。俺の手はスカートに命中はしたものの、殺気を感じたであろうターゲットは、瞬時にスカートを手で押さえつけてしまったのだ。こやつ………出来る！

作戦が失敗した以上、これ以上ここに長居する必要もない。続々と敵の応援も到着している。ここは戦略的撤退を行うのが正しい判断だろう。そう思った俺は、バッグを片手に走り出した。俺とすれ違う男子生徒達は、俺に向かって盛大な拍手を送ってくれ、女子生徒達は尊敬の眼差しで俺を突き刺すように見る。

「くら！ 待ちなさいよ！ この変態コウジ！」

後ろから女子生徒の、愛する者を引き留めようとする声が聞こえ

る。胸は痛むが、俺には早く帰ってやらなければいけないことがある。心を鬼にして、俺は玄関へ猛ダッシュした。

俺の家の隣に、美野里さんという女性が住んでいる。『みやさとさんじゃないぞ。『みのり』さんだ。れっきとした名前だ。ちなみに既婚者である。俺の千里眼によれば、年齢は30代前半だ。おつとりとした美女で、肩の下辺りまで伸ばした黒髪が眩しい。おまけにスタイル抜群である。ちなみに夫はそこらへんの草むらから普通に出てきそうな、至って普通の眼鏡をかけたサラリーマンである。くそつ、うらやましい。

最近になって土地を買い、この町に移り住んできたのだが、彼女はただの引越してきた隣人という枠を越えて、毎日のように俺へ希望を運んでくれる存在となった。おいおい、その君、変な勘違いをしないでくれよ。別に俺は美野里さんの不倫相手でも対戦相手でもない。そんな関係になれば良いなあと思っているだけだ。人の幸せを奪おうなんて、ちっとも考えていないよ。

このことについて説明すれば少し長くなるのだが……え、もう長い？ 気にするな、問題はない。俺の家と美野里さんの家の家は一戸建てで、俺の部屋は二階、彼女の部屋は一階にある。そして俺の部屋は、彼女の家の周囲を囲っている塀を飛び越えて、彼女

の部屋を覗くことの出来る位置に存在するわけだが、これが重要だ。

彼女の生態は驚くほどに一定している。まず、朝の8時頃に夫を玄關まで見送り、新妻の必殺技とも言うべき『夫への、いつてらっしやい、ちゅっ』を発動する。くそっ、うらやましい。その後、天気が良ければ洗濯物を干し、続けて掃除や他の家事を行う。11時頃には彼女は作業をいったん止めて、食事の準備をする。そしてドロドロした昼ドラを見ながら優雅な昼食をした後、日によって様々な趣味をたしなむ。お菓子作り、読書、書道、生け花、ガーデニング、盆栽、あやとり、剣玉etc・・・彼女の趣味は幅広い。この俺でさえ把握出来ない程だ。え？　なんでそんなに詳しいのかって？　そんなことは今、重要なことではない。

話を戻そう。そうして自分の時間をしつかり堪能した後、帰宅する夫のために夕飯の準備をするのだが、その前が問題のポイントだ。彼女は台所に立つ前に、一度シャワーを浴びる。どうやらそうしないと気が済まない性分らしい。だが驚くべきことに、そのとき彼女は着替えを脱衣所ではなく、自室で行うのだ。私はそれを、夫が不在という安心感と、タンスから取り出した衣類をわざわざ脱水所まで持っていく面倒さからきている行動だと分析している。しかもだ、彼女は周りが堀で囲まれているという安堵感からか、外が暗くまで自室のカーテンを閉めない！　つまり・・・、これ以上は賢い諸君なら分かるだろう。察してくれ。

そういうわけで、俺は学校と家を結ぶ歩いて30分の道のりを、猛スピードで駆け抜けているわけだ。この目に、女神の祝福を頂く

ために。

余談だが真夜中の間、彼女の自室はカーテンが閉まっているだけでなく、人の気配すらない。おそらく彼女は夫の部屋で一緒に寝ているのだろう。くそっ、うらやましい。

ファースト・コンタクト

校舎内からずっと全速力で走っていたため、息が苦しくなる。俺は左腕にはめてある腕時計をチラリと見た。現在時刻は4時52分。ヤバい、美野里さんが服を脱ぎ出すまで、残り8分しかない。もしこれを逃してしまえば、彼女の湯上がりの姿しか見ることが出来ない。自ら進んで服を脱いでいくシーンを堪能出来ないじゃないか！

俺は走るスピードを上げる。とつくの昔に俺の足は限界を越えた。元々、運動が得意な方ではない。長距離走なんてもつての他だ。それでも俺が走り続けていられるのは、美野里さんへの煮えたぎるような愛情のおかげである。

後もう少しで我が家というところで角を曲がったとき、俺は道端に普段は見慣れない物を目にして、思わず立ち止まった。美野里さんの生着替えのことも、すっかり頭から抜け落ちてしまった。

少女が倒れていた。年は俺と同じくらいだろうが、何より先に目に入ったのはその格好だった。黒を基調にして、所々に青のラインが入っており、荘厳な雰囲気漂わせていて、女性が着るにはあまりにもミスマツチな感じを抱かせる。まるで、中世のヨーロッパを

舞台とした物語に出てくる、悪い領主が着ているような服である。髪の毛は紫色で、おそらく染めているのだろう。地毛が紫色の人間がいるわけないし。ということは、きっとコスプレ趣味を持った少女に違いない。なんで倒れているのかは謎であるが。

まさか、見て見ぬフリをするわけにもいくまい。コップ一杯程度の善意とスプーン大さじ一杯程の好奇心から、俺は少女に近づいて顔を覗きこむ。そこで、俺は彼女が端正な顔立ちをしていることに気づいた。色白で、目を閉じている横顔は気品を漂わせている。なかなかの美少女だ。さらに、胸もなかなか膨らんでいて、抜群のプロポーションである。思わず長いこと見とれてしまっていたが、何も反応を返さない。呼吸はしているので、おそらく気を失っているのだろう。

「おい、大丈夫か」

問いかけてみるが、返事はない。さて、どうしたものか。一番てっとり早いのは携帯電話で救急車を呼ぶという、善良な市民のごく一般的な対応をすることである。しかしこの娘にとっては残念なこと、俺は善良な市民ではなかった。こんな美少女をあつさり手放すわけあるかよ。うひひひひ。

それに、こんな格好をして倒れているなんて普通じゃない。何か深い理由があったのではないか、と思う。

例えば、この子は両親の暴力から逃げるために家出した少女で、とあるサイトで知り合った男性の所へ転がり込んだのだが、実はその男には変態的趣味があり、少女にコスプレを強要したあげく、終には彼女に自分を鞭で叩くように懇願してきて、そのことに恐怖を感じて逃げ出してきたとか。あるいはこの子は反メイド組織『抹茶味の鯛焼き』の一員で、全日本メイド協会から追われる立場にあるとか。どちらにしても、安易に警察へ突き出すような真似は避けるべきだろう、と俺は考えた。幸いにもこの子は気絶してるだけのようで、目立った外傷もないし。救急車を呼んだり、警察に電話するのは、ひとまず彼女の話聞いてからでも遅くないだろう。

そこで、俺は考えた。俺の父親は会社の長期出張に行っており、一ヶ月は戻ってこない。母親は今日から高校時代の友達との温泉旅行に行っていて、帰ってくるのは二週間後。つまり最低二週間、我が家には俺以外の人間は帰らないということである。

つまり……だ。計画としてはこの娘を我が家に持ち帰り、手厚い看病を行う。そして俺に好意や恩義を感じたところで、あんなことやこんなことをふはははは。名案だ、実に名案だ。俺はさっそく実行に移すことにした。

しかし、どうやって家まで運ぶのが問題になった。個人的には背中にしよって、『やっべなんだか柔らかい物が背中に当たってるよヒャッホイ！』というようなことをしたいと思ったのだが、断念した。決して善意からではないぞ、ご近所の世間体を気にしての判断だ。かといって、アスファルトの上を引きずっていくのも気が引ける。

迷った末に、お姫様だっこをすることにした。これでも十分恥ずかしいが、見ず知らずの男に『やっべなんだか柔らかい物が当たってるよヒヤッホーイ』されるよりはマシだろう。美少女は俺の想像よりは軽く、髪の毛からはなんだか甘美な匂いがした。幸い彼女を発見してから、ここを通行した人間は誰もいない。普段から、あまり人気がない裏道だからだろう。ここから全速力で走れば三分以内に自宅に着く。目撃者がいなければ、何の問題もありはしない。全力疾走のせいで重くなっていた体を無理に動かし、俺は駆けだした。

最初の角を曲がったとき、見事に出くわしました。近所でも有数の、『口が軽い噂好きのおばさん』に。ええ、俺を見た次の瞬間、歯を剥き出しにして、ニヤリとされました。まるで獲物を見つけた狼のようでしたよ。俺はその横を、内心で冷や汗タラタラながらもポーカーフェイスで通り過ぎることしか出来ませんでした。明日には俺のことが、きっと町中の奥さんの間で噂になっていることですよ。

ちくしょう、なんて運が悪いんだ。俺は心の中で涙を流しながら、家まで突っ走っていった。

これが、俺と彼女とのファースト・コンタクトだった。そしてまた、俺の過ごしてきた平凡な日常が、終わりを告げた時でもあった。

最悪の第一印象

家に到着すると、俺はまず彼女を押し倒し倒し……もとい、居間のソファに仰向けで寝かせた。そこで俺はゆっくり彼女の体を眺める機会を得たわけだが、うーん、服の上からかすかに覗ける胸の谷間が悩ましいです。しかしスタイル良いなー、細身だし。モデルとしても通用するんじゃないだろうか。いや、実際そうなのかも。脳内から『このままいつそ剥いでしまおうよ!』という悪魔の囁きが聞こえてはくるのだが、あいにくそれを実行する勇気は持ち合わせてないので、眺めるだけである。ちくしょう、俺の根性無しめ。

しばらくはずっと様子を見守っていたのだが、そこで俺はようやく美野里さんのことを思い出した。しまった、すっかり忘れていた。現在時刻を見ると、5時32分。大丈夫だ、まだ間に合う。俺は居間に彼女を置き去りにしたまま、先ほどの疲れを物ともせず、もの凄いスピードで廊下を突っ走り、階段を駆け上がった。そして荒々しくドアノブを回す。

自室に入るとすぐさま、机の引き出しの中に置いてある双眼鏡を取り出し、装着する。そのまま隣の家に面した窓にかかっているカーテンを少しだけ開き、その隙間から美野里さんの部屋の様子を伺う。幸いかな、彼女はちょうど着替えの真っ最中であった。シャワーを浴びたことで桃色に染まっているみずみずしいお肌、若妻らしい成熟した肢体、そして下着の中から存在を主張している巨大な母性の塊が、俺の視線を釘付けにする。仕方があるまい、俺はどこにでもいる健全な男子高校生なのだ。男子高校生なら変態、変態なら

正義。簡単な三段論法である。俺は美しい女神の無防備な姿にすっかり心を奪われてしまった。

そのために俺は、背後に突っ立っている女性の気配に気づかなかった。

「？」

何を言っているかは聞き取れなかったが、紛れもない女の声がした。俺はおそろおそろ後ろを振り返る。

「……え」

居間に寝かせて置いた彼女が蒼く光る目で、こちらを困惑顔で見つめていた。

男性諸君は考えてみてほしい、何か女性に後ろめたいことをやっているときに、女性から話しかけられたときの心境を。そのとき俺は、双眼鏡を見えないように隠すとか、カーテンをさりげなく閉めるとか、適当な説明をして上手くごまかすか、逆に開き直ってみるとか、取りあえず何らかのアクションを起こすべきだったのである。しかしながら、俺は彼女を見つめたまま何かを言うこともなく、両手に双眼鏡を持ったまま硬直するという、最悪ともいべきパターンをとってしまったのだった。何を言われたか分からなかったので、反応出来なかったというのもあるかもしれない。外国語だろ

うか。もしかして、ただ外国に住んでいたというだけで凄いもの扱いをされるといふ、噂の帰国子女というやつか？ いや、そんなわけがないな。むしろ帰国子女ならば日本語話せるだろ、普通。ということは外国人か？ そっぴいやヤケに色白だと思っただよなあ。でも、アメリカとかヨーロッパとかロシアとか、俺が何となく想像した『白人がいそうな国』の人という感じはしない。かといって改めて見つめてみると、日本人というにはやっぱり何か変な感じがするというか、蒼い瞳の純日本人なんていないだろ。

彼女はつつ立ったままの俺を、訝しげに見ていたが、やがて何か気づいたような表情をすると、俺の側に詰め寄り、その右手を俺の額にかざした。も、もしや。俺の頬を冷や汗が伝う。まさか彼女は有数の相撲マニアで、生の相撲をその目に焼き付けるために来日したは良いが、外国通貨を日本通貨に両替することを失念していて、更には日本語をまったく学習しておらず、誰かに助けを呼ぶことも出来ずに、空腹に陥って倒れていた。そして通りがかった美少年に救助され、その優しい男の家で目覚めたのは良いが、あまりの空腹に俺を脅迫して、飯を作らせようとしているのか。もし俺の推測が正しければ、このフォームは日本が世界に誇る伝統格闘技『相撲』の技、『突っ張り』の準備態勢！俺が抵抗すれば即座に彼女の右手が俺の額を吹き飛ばし、彼女は嫌がる俺を無理矢理……い、いやん、俺まだ心の準備出来てないのに。

気がつけば、彼女は俺を見ながら何やら小言で何か呟いている。な、何言ってるんですか、もしかして呪いの言葉でも口走ってるんですか。怖いよ、何だか不気味だよ。助けてお母さああああん！

結論から言えば、俺のまったく想像していなかった現象が起きた。彼女のかざしていた右手から、青白い光が発せられ、俺は眩しさに目を閉じた。何だか、頭の中を探られているようで、頭がムズムズする。その光は数秒間で消え失せたようで、同時に俺の感じた違和感も収まった。俺が再び目を開けると、彼女は既に手を下ろしていた。な、なんですか。このオカルトじみた現象は。もしかして彼女は超能力者なのでしょうか。

「何してんの？」

今度ははっきり聞こえる日本語で、彼女はそう言った。しかし、さっきの不可思議な現象ですっかり頭がクルクルパーになっていた俺は、またしても返事をする事が出来なかった。

余談だが後日、彼女自身に訊ねてみたところ、このとき彼女は俺に『言語複製の魔法』をかけていたらしい。この魔法は、かけた相手の話せる言語を自らの脳内に完全コピーすること出来るという、外国語の勉強が格段に楽になる、学生必見の魔法なのだ。ただし、可能なのは人語だけらしい。犬語や蛇語は流石に無理らしい。もちろん、このときの俺がそんなことを知っているわけではない。

「ちょっと貸して」

黙っている俺に痺れを切らしたのか、彼女はぶっきらぼうにそう言うと、ひったくるようにして俺の双眼鏡を奪った。そしてカーテ

ンの隙間から、さっき俺がしていたように外を覗こうとする。やば
いって！ 途端に俺の体は、さっきまでの硬直が嘘のように彼女を
止めようと動き出した……が、時は既に遅く、彼女は双眼
鏡の向こう側にある景色を見てしまった。俺と、そして今度は彼女
までもが、凍り付いた。

長い沈黙の後、彼女は俺にゆっくりと、本当にゆっくりと振り向
いた。顔には軽蔑の感情がはっきりと浮かんでおり、眼差しはま
るで汚物でも見ているかのようなものである。彼女は俺を睨みつけながら、
吐き捨てるように言った。

「最低」

こうして俺と彼女の関係は、彼女の発した言葉通りの状態から始
まった。

変態と双眼鏡

「つまり」

俺が今さっきやってたことを包み隠さず、それでいてオブラートに伝えると、厳しい視線のまま俺にそう言った。相変わらず口調は冷たい。

「アンタはスケベ心から、隣に住んでいる若い奥さんのプライバシーを、ここから毎日毎日覗き見してるわけね」

俺は厳粛に頷いた。

「まあ、そういうところだ」

彼女は目にも止まらぬ早さで、俺の左頬に強烈な右ストレートを食らわした。衝撃で俺の体は3メートル後ろの壁に叩きつけられたよ。ええ、もちろんダウン取られました。ウイナーはもちろん彼女です。それにしても相撲の次はボクシングですか。次は空手の技でもくるのかねえ。

「いてて……」

痛む体を何とか起こして立ち上がる。体の節々がズキズキした。

そして、彼女の攻撃は口撃へと変わった。

「信じられない！ コソコソ女性の着替えを覗き見るとか、どんな神経してんの！？ よくそんなこと平然と出来るわね！ 罪悪感と

かないわけ！？ 人として頭おかしいんじゃない！？ このスケベ
！ 変態！ 色魔！」

終わることを知らない彼女の罵声の連続。ああ、こんなに綺麗な
美少女の中身が、とてつもないドS女だったなんて。彼女の口から
絶え間なく俺の耳に入ってくる言葉は残酷鋭利で、情け容赦手加減
という類の物はまったく含まれていませんでした。添加物0パーセ
ントです。ナチュラルです。自然には優しいです。しかし、ボクの
心には全然優しくありませんでした。内蔵がえぐれている感じがし
ます。いや、むしろ切り刻まれているといった方が良くかもしれま
せん。

やがて、俺の心に一つの感情が芽生えた。俺は彼女を無表情で見
つめる。

「な、何よ」

俺の内面に起きた変化を動作の中に感じたのか、彼女は罵声を止
めてそう言った。口調の中に、彼女の動揺と不安がにじみ出ている。
俺は口を開いた。

「もっと……罵って下さい」

しばらくの沈黙。

眉をひそめて、彼女がこの空気を破った。

「今、何て？」

俺は恍惚の表情を浮かべて、さっきの言葉をもう一度繰り返した。

「もっと……罵って下さい」

今度は、数分間沈黙が続いた。いてもたってもいられず、今度は俺から静寂を破り、早口でまくしたてた。

「もっと殴って下さい。もっとぶっ飛ばして下さい。蹴りつけて下さい。踏みつけて下さい。お尻をぶって下さい。鞭で打って下さい。縄で縛り付けて下さい。ボクのことを、沢山いじめて下さい」

彼女は青ざめて、俺から離れようと後ずさった。そして目線を外し、まるで可哀想な物を見るような目でちらちら俺を見た。明らかに引いていた。そして呟くように言った。

「気持ち悪い……」

俺は胸の中が、キーンと高まった気がした。もっと、もっと言ってくれ！俺は心の中で祈ったのだが、しばらく彼女は微動だにしない。しかしその痛い目線も気持ちいいよ。しあわせえ。

夕焼け空が夜空へと変わった頃、俺は自分を取り戻した。危なかった、もう少しで変な趣味に目覚めてしまうところだった。そして俺はベッドに座り、彼女は机の椅子に腰掛けている。未だに目線がキツイ。それにノーマルに戻ったせいで、それが嬉しくも何ともない。

「まあ、何だ。さっきのは一種の気の迷いと言う奴だ」

「かなりマジだったように思えたけど」

「いや、俺は至って普通の男子高校生だ。変な性癖などない」

「変態じゃない」

コイツは男子高校生というものをちっとも理解していないな。俺は大きいため息をつく。

「普通の男子高校生は変態なんだ」

彼女は顔をしかめた。

「アンタの言ってる男子コーコーセイっていうのはイマイチよく分かんないけど、相当ヤバい人種みたいね。犯罪者予備軍の集まりじゃない」

あれ？ 俺は何だか戸惑う。どうして高校生という単語が通じないんだ？ というより、なんで彼女は今、日本語を話せているんだ？

今更かよ、と自分でも思う疑問を、俺はその時になって初めて感じた。

またもや余談ではあるが、『言語複製の魔法』は自分の知識内の言語しかコピー出来ない。簡単に言えば、頭の中でイメージ出来ない言語はコピー出来ないということだ。スイカを知らずに、ウォーターメロンの単語は覚えられない。つまりはそういうことだ。何でスイカは英語でウォーターメロンなのだろうか。メロンと混同してややこしいと個人的には思う。まあ、俺は好きだよ。メロンくらい大ききさも、スイカくらい大ききさも。え、何を言ってるのか分からない？ 大人の話だ。気にするな。

「ところで、私も聞きたいことがあるの」

初めてかもしれない。彼女が俺にマトモな会話を仕掛けたのは。

俺は勢い勇んで答える。

「お淑やかな人が良いかな。そんなでもって家事が得意で、細やかな心配りが出来る人。後、メロンくらいはがあると嬉しい」

「いや、私そんな情報を聞きたいわけじゃないんだけど」

あれ、何だか会話が噛み合わないな。俺の頭の中にいくつものハテナマークが浮かぶ。

「え。俺の好きな異性のタイプを聞いて、それに合わせようと思っ
てくれたんだろ？」

「ちゃうわ！」

今度はかかと落としが炸裂しました。予感的中したようです。
凄いなあ、俺。予言者とか向いてるかも。ていうか、何で関西弁や
ねん。

「私が聞きたいのはコレについてよ、コレ」

彼女は、ずっと手に持っていた双眼鏡を振った。

「それ？ ただの双眼鏡だぞ」

「へえ、ソーガンキョーって言うのね」

彼女は双眼鏡を、まるで宝石を眺めるようにうつとりと見た。お
いおいちよつと待て。なんでただの双眼鏡ごときにそんな表情にな
るんだよ。ていうか、双眼鏡知らないのか。

「そんなに双眼鏡が珍しいのか？」

「ええ、『視力強化の魔法』を物に固定して、その効果を持続させるなんて凄いわ。これ、アンタが作ったの？」

「いやいやいや、人を散々異常者扱いしたくせに、おもいつきりお前の方がずっと電波なこと言ってるじゃねえか！ 何だよ詩力狂歌の魔法って！ 詩なのか狂言なのか短歌なのか分かんねえよ！」

俺はそんなツッコミを取りあえず心の内に留めておいて、努めて冷静に言った。

「いや、それは市販の双眼鏡だよ。どこにでも売ってる。魔法なんて非現実的なものは使われてない。それよりお前、一体何者なんだ？」

俺は一呼吸、間を置いた。彼女は黙って、俺の言葉に耳を傾けている。俺はまた口を開いた。

「突然日本語を喋れるようになったかと思えば、高校生なんていう一般常識を知らない。それに、ただの双眼鏡なんか目に輝かせている。何故なんだ？」

喋り終わり、俺は口を閉じて彼女の返答を待つ。彼女はしばらくして、言葉を選びながら言った。

「それは、私がこの世界の住人では無いからよ」

魔法

俺は最初、彼女の発した言葉の中身があまりに突飛すぎて、素早く理解することが出来なかった。取りあえず天井を見上げつつ、ひらがなで考えてみる。

『それはわたしがこのせかいのじゅうにんではないからよ』

うーん、切れ目がよく分からない。ということ、漢字に変換してみる。

『其れ綿滋賀子之背会の十人で花井からよ』

其れ 綿 滋賀子 の 背 会 の 十 人 で 花 井 から よ。
なんとなく分けるとこんな感じになった。つまり、訳するところいうことだ。

『彼らは、綿滋賀子さんの背を愛でる会の十人で、花井さんから派遣されてきた』

いやいや、ちょっと待て。綿滋賀子さんと花井さんって誰だよ。
なんで背を愛でるんだ。十人って、何だか選ばれし者の響きがするけど気のせいなのか。

上記のような自問自答を経て、俺はやっと事の重大さに気がつい

た。これはヤバい。本気でヤバいぞ。俺は彼女に視線を戻す。

「つまり、お前は異世界から来たってことか？」

彼女はコクリと頷く。俺は冷や汗が頬を伝うのを感じた。

「そうよ」

「そして、その世界には魔法が実在すると？」

「そのような表現の仕方からすると、どうやらこの世界には魔法が存在しない、ということね」

「ああ、そうだ」

「モンスターもいないの？」

「モンスター？ 動物じゃなくてか？」

「ええ。動物は基本的には人畜無害。けれどモンスターは故意に害を与える恐ろしい怪物。ちなみに私は彼らを従える、魔王なんだけどね」

うむ。これは本当に、ヤバい。早急に対処しなければ。

「だいたい事情は飲み込めた」

「そう」

彼女は少しホッとしたようだった。

「アンタみたいなのでも、取りあえず話が通じて良かったわ」

「病院に行こう」

彼女は目をパチパチした。

「……は？」

「病院に行こう、と言ったんだ」

俺は深呼吸をして、自らの気を沈める。あくまで冷静に、過度に刺激しないようにしなければ。

「落ち着いて聞いてくれ。おそらく君は何らかの大きなショックによつて精神、もしくは記憶に異常をきたしている。魔法なんてものは現実には存在しないし、モンスターなんて架空の生物だ。君は魔王なんかじゃない。れっきとした人間だ。取りあえず病院に行つて、精密検査をしてみよう。大丈夫、治療を受けたらきっと元の自分に戻るさ」

我ながら完璧な説得だ。これで彼女も、きっと俺の事を信用してくれるに違いない。

彼女はソファから立ち上がると、ゆっくりと俺の方へと近づいてきた。顔は、怖いくらい無表情である。

これはヤバいですね、はい。目が笑っていません。どうやらさつき危惧した『過度の刺激』というものを与えてしまったようです。俺は最近まで月曜日の午後9時から放送されていた一時間ドラマ『お前の机の上のラブレター』によるしく』を思い出した。これはとある男子高校生が大胆にも放課後、好意を抱いている女子の机の上にラブレターを置いて帰ったのだが、翌朝その手紙を見た女子高生はそれを自分への果たし状だと勘違いし、この事が学校中を巻き込む大騒動に発展していく……というものだった。つまり俺が何を言いたいのかというところ、おそらく彼女は精神錯乱のあまり、自らを異常者と言いつつ俺を敵だと認識しまっているらしい、という事だ。早くここから立ち去ろう、下手すると命を落としかねない。

などと妄想を膨らませていた間に、彼女は俺の目の前に立っていました。なんとということだ、逃げることを考えるあまり逃げる時間がなくなってしまうとは。本末転倒じゃないか。彼女の右手が、手のひらを返した状態で、俺の顔の前に開かれる。一般的な『お手しなさい』のポーズだ。これも何か格闘技の技なのだろうか。状況からして攻撃されるのは俺の顔なわけで、明らかに今までに比べて、耐久力的にダメージが大きい箇所です。殺る気満々ですね……
・ってのんびり構えてる場合じゃない。

「話せば分かる、話せば分かるから落ち着いてくれ」

彼女は薄く笑いました。笑いながら無言です。俺は背筋に寒気が走るのを感じた。これはいよいよ年貢の納め時かもしれない。ああ、美野里さん。最後に貴女の生着替えを堪能出来なかったのが心残りです。脳裏に、彼女の柔らかな笑顔と、豊満な胸と、悩ましい体がい出される。ちくしょう、俺は最後の瞬間までこんななのか。

まるでガスコンロで火をつけたときのような音がして、彼女の突き出した手のひらの上に青色の火の玉が生まれた。いきなりのことくに度肝を抜かした俺は、とっさに後ずさりしようとしたが、なにぶんソファに座っている御身分だったので、叶わなかった。

「これでどう？ 魔法を使わずに炎を作り出すなんて、こっちの世界じゃ出来ないことでしょ？」

彼女は、もう納得出来るでしょ、とでも言いたげな目で俺を見た。

「いや、技術のあるマジシャンなら、そういうことは出来る。前に路上で見たことがある」

彼女は怪訝そうな顔をした。

「魔法は存在しないのに、魔法使いはいるの？」

「いや、そっちの世界のマジシャンとはちよつと違う。詐欺をして人々を楽しませる仕事をしてる人たちのことだ」

「ふーん、なんだか想像がつかないわ。それにしても、困ったわね」

彼女は腕組みをして考え込み、やがて何か閃いたように左上の手の平を握った右手で叩いた。

「そつだ、これならどう？」

彼女は俺から離れ、周りに空間を確保すると、何やらブツブツ唱えだした。俺は黙って、その様子を見守る。

やがて彼女を中心に、地面に茶色く光る五亡星が勝手に出現した。そして、同じ形をしたものがもう一つ、彼女の正面の床に出現した。

彼女は唱え終わったようで、じっと目の前の五亡星を見つめていた。そしてしばらくすると、その五亡星の中から化け物のシルエットが浮かび上がって、やがて実体化した。

彼女の過去と、俺の決意

『それ』は俺、つまり平凡な男子高校生と比べて、ずいぶん逞しい体つきをしていたが、外見は人間に近い。俺の頭の中にあつた、架空の生物の名前が浮かぶ。

「……………ゴブリン」

俺は思わず声に出していた。

「あら、なんだ。コイツも知ってるわけね」

彼女は残念そうに言った。どうやら、向こうの世界でもゴブリンという呼称らしい。

「いや、そんな生き物はこの世界にはいないはずだ」

この世界、と俺は呼称した。この時、俺は既にこの現実を受け入れ始めていたのだ。いや、受け入れざるをいけなかった、の方がしっくりくるかもしれない。俺はじっくりとゴブリンを観察する。ゴブリンは魔法陣の中央に立ち尽くしたまま、身動き一つしない。俺は魔法陣に近づいた。

青い火の玉は、よくある小手先のマジックの一つだろうと考えることが出来た。しかし今回はどうだ。まず、床に現れている魔法陣。床に初めからトリックを仕掛ける暇なんて、なかったはずだ。俺は覗き見していたとき以外、この少女と行動をともにしていたのだから。そして、何も無い空間からこのゴブリンを発生させたこと。マジシャンはよく手の中から薔薇を取り出したり、シルクハットの中

から白い鳩を出現させたりするが、その裏には『目には見えない場所から出てくる』という大前提があるのであって、こんな風に文字通り丸見えの場所でそれを行うことが出来るとはどうしても思えない。それにゴブリンが作り物だとも思えなかった。肉質感や、赤い眼孔。体に残るいくつもの傷跡。全てが生々しかった。特殊メイクとは思えない。

「このゴブリンは、お前の召使いか何かか？」

「ええ、『契約』を結んでいるから好きなときに呼び出せるのよ」

『契約』とやらが何かはともかくとして、俺はどうやら彼女の言うことを信じないわけにはいかないらしい。俺は彼女の方を振り返る。彼女の足下にも、未だ魔法陣が残っていた。

「つまり、お前は本当に異世界の魔王なわけだな」

「やっと信じる気になったのね」

「まあ、こんな実物を見せられたら信じないわけにはいかないだろうよ」

俺はゴブリンの方を振り返る。相変わらず、動かない。

「それじゃ、彼は元に戻すわよ」

そう言つと、また彼女は何かを唱え始める。程なくして、2つの魔法陣とゴブリンは、跡形もなく消えた。

その後、俺は彼女と先ほどのようにソファに座って向かい合い、彼女の話聞いた。

彼女は元々、異世界のとある大陸を支配する魔王の一人娘だったらしい。彼女の父、そしてその同土達は、彼女の世界を征服する野望に向けて日々頑張っていた。しかし先日、腹心の部下であった魔族のクーデターにより、父親は失脚してしまう。父親とその家族、そして彼らに忠誠を誓う一部の魔族達はクーデター派の魔の手から命からがら逃げ出すことは出来たものの、散り散りになってしまふ。彼女は両親と行動して、とある谷を抜けようとしたのだが、暗殺部隊に追いつかれて、逃げるうちにとうとう後は断崖絶壁という所まで追い込まれてしまった。そこで両親は彼女を逃がすために、最後の力で彼女をこの世界へ送り込んだのだった。そのとき彼女の見た最後の光景は、数多くの魔物が傷だらけの父親と、その横にそつと寄り添う母親に襲いかかる場面だった。話を進めるにつれて、彼女の顔はだんだんと暗くなっていた。無理もない。きっと自分の両親の安否が心配なのだろう。

俺は俺で、この少女にそのようなハード過ぎる過去があった事を知ったために、ひどくショックを受けた。それと同時に、口には出さなかったが、今までの軽率な行動に対する罪悪感も湧いてきた。

「辛い思いをしたんだな」

俺は正直な気持ちをストレートに表現した。言うてから、他人事のような表現になったことを後悔した。彼女は下を向いて頷いた。やがて、水滴が彼女の膝を濡らし、静かな嗚咽が聞こえてきた。俺は慰めの言葉一つかけてやれず、黙って見つめることしか出来なかった。どうして誰かが心の底から傷ついているとき、俺は何もしてあげられず、優しい言葉すら投げかけられず、ただ無力なのだろうか。俺は自己嫌悪の気持ちをそらすために、下唇を噛み続けた。しよっぱい血の味が何となく心地よかった。

「お願いがあるの」

しばらくして落ち着いた彼女は、俺が淹れた紅茶の入ったティーカップを受け取りながら言った。

「私はこれから元の世界に戻って、父の土地を取り戻す。いや、それだけじゃないわ。両親のためにも、死んでいった同胞達のためにも、彼らの悲願だった世界征服を実現してみせる。けれど、土地も人員も、何もかもが不足してるわ。アナタに協力してほしいの」

彼女はそこで言葉を切り、俺の返事を待った。俺は紅茶を一口飲んで、ティーカップをテーブルの上に置く。

「協力っていつても、俺には何の力もないぜ」

「それでも、いないよりはマシよ。今の私には部下一人いないもの」

「さっきのゴブリンがいるじゃないか」

彼女はため息をつく。

「ゴブリンは力はあるけれど、頭は空っぽよ。私が欲しいのは、軍師だったり戦闘指揮官だったり、そういう人材なのよ」

なるほど。確かにその通りだ。俺は戦闘のプロフェッショナルではないが、戦略シミュレーション系のゲームはいくつかがやったことがある。そういうゲームはシミュレーションRPGにおいて重大なウェイトを占める『戦闘パート』というものがありはするのだが、大抵その前の『プレイヤーがどのように戦闘に向けて準備していたか』によって勝敗が決まってしまう。例えば相手の有用な人材を引き抜いたり、仲間割れを誘発したり、政治的手腕で敵国を孤立に追い込んだり、そのような計略を行うことで戦いが非常に楽になっていく。それに、先ほどの言葉と矛盾する言い方だが、どんなに数的に劣勢な戦闘だったとしても、それを率いる指揮官次第で、不利な状況を巧みな戦術で押し返すことも出来るだろう。戦いはただ闇雲に突っ込めばよいというわけではないのだ。現実の戦いとゲームのそれとがまったく同じ作りだとはいえないだろうが、彼女の言いたいことはそういうことではないだろうか。頭の切れる策略家。そして熟練したスキルを持つ、戦闘指揮のプロフェッショナル。例えばどんなに力が強くて、これらの役目は決して出来ないだろう。力だ

けが強さではないのだ。

俺にそのような役目が務まるのか。正直な気持ち不安はあった。けれど、先ほどの彼女の顔が、俺の不安をかき消した。何か彼女の役に立てるかは分からないが、取りあえず、孤独の彼女が信頼出来る仲間を取り戻すまで、その世界征服とやらに付き合ってやるう。

「分かったよ、協力する」

俺は笑ってそう言った。

「ありがとう」

彼女もまた、笑った。彼女が俺に見せた、初めての女の子らしい、はにかむような笑顔だった。

第一次浴槽突入作戦

俺は自分と彼女の間にあっただわだかまりが薄らいでいくのを感じて、安堵の気持ちを抱いた。しかし微笑んだままの彼女の口から飛び出してきた発言が、その気持ちを空の彼方へすっ飛ばしてしまった。

「じゃあ、アンタは私の家来第一号ね。当然、この土地と住居は私の物になるから」

えーっと、似たようなフレーズどこかで聞いたことあるぞ。なんだったかな。そうだ、思い出した。中学校のときに体育館で放送された、悪徳金融についての教育ビデオだ。口車に乗ってしまつたあげく、確か借金が雪だるま式に増えていって、しまいには全財産を接收されてしまったんだっけ。教育ビデオにしては後味が悪いストーリーだったよ、うん。

っておい。

「ちよーっと待った！ 何でこの家をお前にやらねばならんのだ！」

「は？ 何言つてんの？ 家来なんだから、本拠地くらい提供しなさいよ」

「そういうことは先に言えよ！ それにここは俺の持ち物じゃないし」

この家は我が父が、20年ローンを組んでやっと手に入れた家なんだぞ。後9年も残ってるし。

まあそんなこんなで、さっきの感動は何処へ行ったのか、俺たちは言い争いを始めたのだが、彼女はしぶしぶ、この土地と家は取り上げないことを了承した。

「でも、私の寢床くらいは提供しなさいよね」

確かに彼女を外に放り出しておくのは気が引ける。こんな美少女が公園のベンチなんかで眠っていたら、変質者がほっとかないだろ、普通。まあ、この家の中にも俺がほっというおかないんですけどね。けけけけ。

「分かった。取りあえず2週間は親も帰ってこないから、しばらくはここを使ってくれ。寝るときは俺の横にできれば良いし」

ぶん殴られました。

「ソファで寝る」

「はい」

腫れ上がった右頬をさする。すんごく痛いです、トホホ。

と、そのとき。彼女のお腹が凄じ勢いになった。そう、擬音語で表現するなら『ぐぎゅうぎゅぎゅぎゅぎゅうぎゅぐるるる』といった感じだろう。

彼女は怒りの表情から一変して、りんごのように顔を真っ赤にして俯いた。まるで恥じらう乙女である。ヤバイ、可愛すぎる。心の中でちょっと胸がときめいた。しかし、なにしろ効果音が面白すぎ

た。

「ぎゃはははは！ 何だその腹の音！ まるで怪獣の鳴き声じゃねえか！ あひゃひゃひゃひゃ！ は、腹が痛い！ ギゃははははははははははは！」

一瞬にして彼女の顔から表情が消えた。

「そう、腹が痛いよね。治療してあげる」

淡々とした口調で告げた彼女は、素早く俺との間合いを詰めて、得意の右ストレートを俺のへそにぶち込んだ。

「ぐげえ」

俺は泡を噴きながら、ソファから崩れ落ちた。

「まるで、カエルみたいな声ね」

彼女は床で悶絶している俺に、冷たく言い放った。ちくしょう、実力行使なんてそんなの反則だ。いつか訴えてやる。

驚異の生命力で回復した俺は、晩飯を作ることにした。時計を見ると、午後9時をまわっていたし、俺も彼女に負けず劣らず腹が減っていたからだ。

俺はフライパンにサラダ油を少し引き、ガスコンロの火をつける。油が泡を噴き始めたので、二人分の白飯と、チャーハンの素、そして色とりどりの野菜をつっこみ、箸でかき混ぜる。頃合いを見計らって、予めといておいた卵を投入した。

今回のように親がどちらともいない時がときどきあるので、俺は簡単な料理なら調理することが出来る。無論、食べるだけなら冷凍食品やインスタントラーメンでも問題ないのだが、調理する感覚が何となく好きなので、俺は度々自分で料理をする。聞くところによれば、彼女は逃亡中にまともな食事が出来ていなかったそうなので、俺は栄養のことも考えて、野菜をたっぷり入れたチャーハンを作ることにしたのだ。その間、彼女には我が家のお菓子カゴにあった、煎餅を与えておいた。

「凄く美味しいじゃない」

彼女は一口かじって、それから貪るようにバリバリ音を立てながら食べ始めた。300円の特価品なんだけどな、それ。

出来上がったチャーハンの入った皿を目の前に置くと、これまた彼女は凄い勢いで食べ始めた。相当、腹が減ってたんだろうなあ。そう思いながら、俺はチャーハンを味わって食べた。うん、味は悪くない。

「アンタ、意外に料理上手だね。ビックリしたわ」

褒められて悪い気はしない。俺は照れ隠しに頬をかく。

「まあな」

彼女の皿に多く盛ってやったから、食べ終わるのはほぼ同時だった。彼女が風呂に入りたいと言い出したので、俺はお湯を浴槽に張ると、彼女を風呂場へと案内した。向こうの世界には、どうやら機械類は存在しないようで、俺がシャワーの使い方などを教えてやると、興味しんしんで聞いていた。

そして、彼女は今、上機嫌でお風呂に入っている。

私は居間から音を立てないよう慎重に移動し、現在は脱衣所に待機して様子を見ている。賢い諸君ならば、私が何を考えているかは分かるだろう。つまりだ、私の家の風呂場とこの部屋を隔てるドアには、鍵がついていない。つまり、いつでも突入可能だということである。これはやるしかあるまい。この作戦の結果として命を落とすとしても、その勇気ある行動は日本男児として誉れあるものであり、私は同報達から未来永劫の尊敬を集めることあるう。この僅か数メートル先には、女性が生まれたままの姿で存在しているということだけが、今の私にとって価値のある真実である。

もはや、迷いはない。

私は全速力でドアノブを掴んだ。

「あれ？」

開かない。ドアノブをまわして押してもビクともしない。

「……………何してるわけ？」

ドアからでも微かに見える、肌色のシルエットが、怒りに震える声でいった。

「いや、あのですね。お背中でも流そうかと思って。えへへへ」

一瞬の沈黙。そして。

「このケダモノが！」

「ギヤアアアアアアア！」

突如、ドアノブから高圧の電流が流れ、体がもの凄い痙攣を起し、俺は地面に倒れた。意識を手放す前に視界に入った俺の両腕は、黒こげになっているように見えた。

彼女の名前とこれからと

気がつくのと、俺はソファの上に寝かされていた。彼女が運んだのだろうか。彼女は俺が用意しておいた、母のパジャマを身につけて、他方のソファに腰掛けて牛乳を飲んでいる。服のサイズが少し大きいようで、両手がほとんど袖口に隠れていた。

起きあがろうとしたが、体が痺れてうまく動けない。彼女は俺が目を見ましたことに気づいた。視線は冷やかである。

「あら、もう起きたの。意外に魔法に対する耐性はあるのね」

「女性から半殺しにされるのは慣れてるんでね」

俺はおどけて言った。ちなみにこれは冗談では断じてない。

最初に半殺しにあったのは、小2のときだっただろう。クラスメイトの女子数人のお尻をイタズラ半分に触ったことで、確か公園にある水色のゴミバケツの中に無理矢理押し込まれた。体中の骨という骨が無茶な体勢に悲鳴をあげたのを覚えている。3日間が経つて、俺は地元ボランティアの方に助けてもらったのだが、しばらくは前かがみで生活せざるを得なくなつた。ちなみに実行班達は、お咎めなしであった。むしろ、救助された俺の方がたっぷりお説教を食らつた。

「そつえば、どうしてさっきドアが開かなかつたんだ？」

「どこかの変態が何かやらすかもしれないから、『固定の魔法』をかけておいたのよ。ついでにちよつと細工をして、ドアを開けよ

うとしたやつには電撃が走るようにしておいたわけ」

「ほお、魔法って何かと便利な代物だな………って、ちょっと待てよ。」

「つまり、俺のことを信用してなかったのか！ あんまりだぞ！」

「自分の行動を振り返ってみれば」

「すごい迫力で睨まれたので、俺は萎縮するしか出来なかった。」

「ところで、これからどうするんだ？」

「俺は彼女に尋ねた。体の痺れはもう回復している。」

「そうねえ」

「彼女は壁にかかっている時計を見る。時刻はもう午前0時を過ぎている。」

「今日は遅いし、もう寝ましょ。明日になったら、実際に私達の世

界に行ってみましょ」

「え、そんなに簡単に行けるものなのか？」

確か彼女の両親は、最後の力を振り絞って彼女をこの世界へ連れてきたはずだ。世界を飛び越えるというのは、それだけ困難なことだと思っていたのだが。

「自分自身の世界に戻るというのは簡単なことなのよ。ただ、異世界に転移する場合は、かなりの魔力が必要なの」

両親のことを思い出したのだろうか、彼女の顔が曇る。俺は慌てて話題を先に進めた。

「つまり、向こうに行くというのは問題ないんだな。だけど、こっちの世界帰ってくるときはどうするんだ？」

「アンタがついてくるなら、その点は心配無用よ。詳しくは帰るときに説明するわ」

「分かった。それともう一つ、向こうの世界に行った後、こっちは帰ってくるのか？ 俺はこっちでの生活も大事だから、休日以外はこっちで暮らしたいんだが」

流石に、学業に影響するのはマズい。

「そうね。ガルザークも私の命を狙っているでしょうし、向こうに長居するのも危険ね。しばらくは日帰りになるわ」

「ガルザーク？」

「父を裏切って魔王の座に着いた奴よ」

苦虫を噛み潰した顔で、彼女は忌まわしげに言った。

「それじゃ、俺はそろそろ寝ることにするよ。くれぐれも家の外には出るなよ。飲み物は冷蔵庫の中に入ってるから、喉が乾いたら適当に飲んでいてくれ。後、むやみに物には触るなよ」

「分かってるわよ。教育係みたいなこと言わないで」

人が親切心から色々と忠告してるのに、この態度だよ、はあ。俺は心の中でため息をつく。外見は可愛いのに、中身はこれだからなあ。

「それなら安心だ、それじゃおやす……………」

「ところで、まだ自己紹介してなかったわよね」

そのとき、俺は未だに彼女の名前を知らないことに、今更気がついていた。

「私の名前は、フィオナ・ルシファード。誇り高きルシファード家の第56代目魔王よ」

「俺は速水浩治だ。コウジって呼んでくれ」

彼女は微笑む。俺も笑い返した。

「コウジ、ね。分かったわ、これからよろしく」

「ああ、よろしくな。それじゃあ、お休み」

「ええ、また明日」

これは、夢なんじゃないだろうか。ベッドに潜り込みながら、ふと俺は考えた。倒れていた美少女が異世界の魔王で、明日から自分は彼女の世界征服を手伝う。あまりにも現実離れした出来事。

「まあ、面白くなってきたし別に良いけどな」

思わず、口に出していた。毎日続くありふれた日常に内心ウンザ

リしていた俺が求めていたのは、きつとこつという事だったのだ。魔法が飛び交い、怪物と戦う、スリル満点の冒険。ワクワクするファンタジーを読み終える度、子供心に、いつか旅に出たいと思っていた。けれど成長するにつれて、現実はおとぎ話のように、胸躍らせる世界ではないということを感じ知らされた。学歴社会、環境汚染、リストラ。現代社会は子供達が胸に抱く幻想を、跡形もなくぶち壊していく。そして俺はいつの間にか、世界に期待することもしなくなっていく。与えられた自由の中で、精一杯自分らしく生きてみようと思った。だがその日々も、もう終わった。頬をつねってみる。痛みは、明らかに今日という日が本当であったと証明した。明日は、異世界に行くのだ。俺の待ち望んでいた、幻想が始まる。そう思うと、自然と頬が緩んだ。やがて、睡魔が襲ってきたので、俺は目を閉じる。意識を手放す直前、何故かフィオナの笑顔が浮かんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8179x/>

魔王を拾ったわけだけど

2011年10月28日02時11分発行